

スタッフが実践研究を習慣化するための管理者の取り組み

静岡県立富士見学園 鶴田安弘

要旨

静岡県立富士見学園は、重度知的障害者の入所施設である。利用者の大半は、特別支援学校の高等部を卒業した後の進路として利用するため、はじめて家族から離れ、大きく環境が変わる中での入所となる。入所者の半分以上が強度行動障害の認定を受け、自傷、他害、破壊、多動、行動停止、不適切な性的行為などがよく見られる。これらの行動の大部分が些細な刺激や、コミュニケーションの失敗により誘発されるため、刺激の軽減と適切なコミュニケーションの方法について、スタッフが日々実践研究を行っている。この実践研究を習慣化し、利用者支援を効果的に行うために管理者ができることを報告したい。

1. 目的

強度行動障害のある利用者に適切に対応するためには、個々の利用者に合わせたコミュニケーション方法を開発する必要がある。アセスメントを行った上で、個々の特性を把握し、コミュニケーションの方法を定め、そのツールを開発する必要がある。また、作成したツールを利用し、生活を円滑にするための手順書も必要となる。これらの研究を職員が主体的に取り組めるよう管理職として、行ったことを報告したい。

2. 方法

従来の支援方法は、日課に沿った生活ができるようスタッフの「声掛け」により行動の促しをしていた。しかし、言葉が分からない利用者にとっての「声掛け」は、ややもするとそれ自体が強度行動障害のきっかけとなることが分かってきた。そこで、管理者として言葉によるコミュニケーションから目で見えて分かる支援＝「視覚化・構造化」に大きく方針を転換し、次のことを実施した。

(1) コンサルタントの招へい

施設内で「視覚化・構造化」のプロジェクトチームを立ち上げ、専門家に来てもらい具体的に実地指導をしてもらった。実際にアセスメントの手法からツールの作成、手順書の作成まで2か月に1度、定期的に指導を仰いだ。

(2) 全職員の強度行動障害支援者養成研修の受講

この研修をスタッフ全員が受講することにより、強度行動障害への対応方法の基礎

理論を学んでもらった。

(3) 参観交流会での展示発表

プロジェクトチームでは、より専門的な成果の報告を、その他のスタッフは、強度行動障害支援者養成研修で学んだ基礎理論を基に研究し、作成したコミュニケーションツールを展示した。

(4) 「視覚化・構造化の取り組み」研究誌の発行

参観交流会で展示・発表したものを冊子に取りまとめ、施設におけるケアの科学化・集積化を図った。

(5) 実践研究の効果測定

職員に対してアンケート調査を行い、視覚化・構造化により利用者の行動が変わったか調査を行った。アンケートは無記名とし、個人の特定や、回答による不利益が無いことを説明し、提出をもって同意を得るものとした。

3. 結果

視覚化・構造化の推進により、個々の利用者の障害特性を捉えた個別化がより推進できた。また、根拠のある支援方法が構築できたことにより、職員の自信にも繋がり実践研究の習慣化が見られた。

4. 考察

職員に対してのアンケート調査によると利用者の行動が変化した喜びがある一方、負担感があることも見て取れた。

引き続き実践研究を進めていくが、職員の負担感をどう解消していくか、検討していきたい。